# 多田池の大蛇

摂津の昆陽池のそばを通りかかった巡礼が、若い女から小さな文箱を託されました。女の頼み通り多田池までやってきて、めあての家を探しましたが見あたりません。しかたなく箱を開けますと手紙はなくて小さな蛇がすべり落ち、草むらに隠れました。

それから数十年の後、池のほとりの氏神様へお参りする人々を、大蛇があらわれて呑んでしまうようになりました。これがあの小さな蛇の成長した姿だったのです。その頃藤田村に三郎太夫という若者がいて、村人の難儀を救おうと決心しました。火薬を大きな瓢箪に詰め、それを藁に包んで人形を作りました。それを社前に置き鈴を鳴らしました。やがて腹の中で火薬が爆発し、大蛇は苦しさにのたうちまわりました。苦しんではねまわったため多田池の堤防が切れ、水が流れ出した為たくさんの家が流されずっと下流で止まったのが、今の家原なのだそうです。

又、その時、氏神の神主が祈って御幣を振りますと水が逆さまに流れて多くの人が助かりました。そこを今でも「逆川」と呼んでいます。

大蛇が苦しんではねまわった所は「蛇ころび」といい、今だに草木は生えていません。又、少し離れた所の岩は「蛇枕」の名があります。こうして水のすっかり無くなった池の底は豊かな水田となり、人々が住むようになりました。

「民話より」